

平成 28 年度 NGO 活動状況調査レポート

平成 28 年度の NGO 活動状況調査は、平成 28 年 11 月 7 日(月)から 13 日(日)までの 7 日間、賛助会員等 7 名をネパール連邦民主共和国に派遣し、NGO 海外援助活動助成及び国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けている「特定非営利活動法人 ラブグリーンジャパン」、「特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか」、「公益社団法人 アジア協会アジア友の会」の 3 団体の活動状況調査を実施しました。

「特定非営利活動法人 ラブグリーンジャパン」の活動地訪問

「特定非営利活動法人 ラブグリーンジャパン」は、平成 4 年度から平成 22 年度までに 16 回、国際ボランティア貯金の寄附金配分受け、洪水防止等のための植林、住民に対する植林技術指導や、住民のための有機野菜栽培・生活改善指導などをおこない、平成 25 年度からは当財団の NGO 海外援助活動助成を受けて、リーダー農民に対する有機農場研修の実施及び研修施設の補修等を行っています。

また、平成 27 年 4 月 25 日にネパールで発生した地震により有機農場研修施設も被害にあったことから、当財団の緊急支援を受けて修復工事を行っています。

訪問した特定非営利活動法人 ラブグリーンジャパンは、カトマンズからアナコット村までは約 50 k m 程ですが、途中、幹線道路から脇道に入った途端それまでの舗装道路と違いデコボコ道となり、更に狭い上り道を車で 1 時間 45 分程度行ったところに有機農場研修施設(以下「研修施設」という。)があります。

研修施設では、カウンターパート(ラブグリーンネパール)と村人を含め 14 人(うち女性 8 人)の出迎えを受け、それぞれの自己紹介のあと、これまで行ってきた酪農(牛乳販売)事業や有機農業事業などのお話を直接伺うことが出来ました。

その後、研修施設にあるバイオガスプラントや家畜の施設、農業用人工池、牛乳の保存用タンクなどを視察させていただきました。

視察後、来た道に戻り幹線道路に戻ったところの近くにラブグリーンネパールの事務所にお邪魔して、パソコン研修センターや果実などの苗木を栽培して

いるところを視察させていただきました。中でも興味深かったのは、横浜国立大学の依頼で、自然農と呼ばれる不耕起・草生栽培の畑地土壌改善、維持のために、実験でカリフラワーを不耕起とこれまでの農法で育てて比較をしているそうです。

研修棟でラブグリーンジャパンの代表からこれまでの事業の取り組みなどのお話を伺いました。

ラブグリーンネパールの事務所を後にして、バネパにある協力農家から仕入れた野菜、紅茶、コーヒーなどを販売しているお店「HOPE」を視察させていただきました。残念ながら収支はあまり良くないようです。



「特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか」の活動地訪問

「特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか」は、平成 8 年度から平成 24 年度までの間に 15 回、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受け、ネパールにおいて孤児のための寄宿舍運営、女性・子供に対する識字教室、住民のための診療所運営指導、縫製・パッチワークキルト技術指導を行っています。また平成 26 年度～平成 27 年度には当財団の NGO 海外援助活動助成を受け、「女性の生活向上のための縫製・パッチワークキルト施術指導」を、平成 28 年度にはそれに加え「製パンマネージメント」を実施しています。

今回、事業地であるジャナクプル県シンズリ郡ドダウリ村は、カトマンズから空路ジャナクプルへ、そこから2台の4WDに分乗して3時間程掛かるところにあります。

ここでも幹線道路では高速道路並みのスピードで軽快に進みましたが、一歩幹線道路を外れると舗装道路はいたるところに穴が空いていて、それをよけながら走り、更に上り下りを繰り返し、3つ程の川を横断し、最後は大きな川の河原を走った僻地にあります。

この村は三方が川に囲まれて、6月～9月の雨期には、ヒマラヤから流れる水量が増えて陸の孤島になるそうです。

夕方近くに到着したので、日が落ちてしまうとこの日の宿泊地へ行けなくなるため、早速、平成28年度海外援助活動助成の事業（パンの製作販売）であるドーナツを試食させていただきました。思いのほか大きく甘さは控えめで1つ食べると、そこそこお腹が一杯となりました。聞くところによると平均1日200個程度売れているそうで、2名のスタッフで行っています。

その後、縫製・キルトの訓練センターに移り、一部屋は、縫製を行う部屋でミシンが12台程度配備されていて4名程の女性が作業を行っていました。もう一部屋はキルト作業の部屋でキルター12名が作成したバック、クッションなどを見せてもらいました。柄はミティラーアートをモチーフにしていて斬新な絵柄となっています。



翌日は、ドーナツを販売しているショップ、マーケット、平成 19 年に国際ボランティア貯金の寄附金配分で建設した 1 年生から 6 年生と就学前を対象とした小学校を視察しました。

その後、カースト制度が未だ残っているドダウリ村の民族が暮らす地域を視察しました。藁や竹でできた屋根、壁は土壁でできているようです。外側の壁はミティラーアートが描かれています。だんだんその数も減ってきているようです。

村を視察の途中に、自立センターの卒業生達が経営している洋服屋がありミシンが数台置かれ縫製作業をしていました。支援してきた女性達が自立して生活している、大変喜ばしい姿であり、一人でも多くの人が自立できる様になると良いと感じました。

村を一回りして、自立センターへ戻ってきて併設している診療所を視察しました。

この診療所は、2006 年にコブラなど毒蛇に噛まれ被害者を救済するために、診療所を建設し翌年から国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けて、日本からの医師、看護師を派遣して医療従事者を指導して、2009 年以降には増築、医療器具を配備しました。

現在は毒蛇に噛まれる被害者も少なくなり医師、看護師、医療検査師もいて立派な診療所となっています。

「公益社団法人 アジア協会アジア友の会」の活動地訪問

「公益社団法人 アジア協会アジア友の会」は、平成 14 年度から平成 22 年度までの間に 11 回、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受け、ネパールにおいてバイオガスプラントの設置、栄養改善指導、環境保全・生活改善指導を行っています。

また、当財団が NGO 海外援助活動助成を創めた平成 25 年度から平成 28 年度まで助成を受けて、バイオガスプラントの設置や小中児童への環境セミナーなどを実施しています。ネパールの地震で被災したときには、当財団の助成を受けてバイオガスプラントの修復も行っています。

今回も 2 台の 4WD に分乗して、約 1 時間で約 2,000m の高地にあるバクタプール郡スダール村に到着しました。

スダール村でのバイオガスプラントの設置事業は 2005 年から現在までで 315 基設置して目標である 25% を達成しています。

バイオガスプラントの設置にあたっては、衛生面からトイレも一緒に設置しています。これはバイオガスのタンクと併用ができるメリットがあり、また、

メタンガスの圧力で滓が外に出る仕組みとなっていて年中掃除する必要が無く手間も掛からないため、この村では今でもバイオガスを作りたいとの要望があります。

バイオガスプラントの1基当たりの設置費用は38,000円程度掛かりますが、そのうち、政府から補助が8,000円程度あるようです。工期は3週間から1か月程度掛かるようです。使用できるガスの量は、家庭の煮炊き程度は賅えますが、農作業に伴う燃料までは賅えません。

更に、メリットとしてバイオガスプラントから出る液肥から肥料を作ることができます。

スダール村を視察することになり、路らしい道ではなく、デコボコの狭い路地をとおり国際ボランティア貯金の寄附金配分で設置した農家のバイオガスプラントや震災で修繕したバイオガスプラントを見て回りました。最初の農家は2007年に国際ボランティア貯金の配分により設置されたバイオガスプラントで、約10年が経過していますが地震の影響もなく現在も使用しています。日当たりが良いので発酵量も多いそうです。一方4人家族が暮らす家屋は地震により傾いていて住める状態ではなく、つかえ棒をして倒壊を防いでいます。

次の農家も仮設住宅は地震で壊れてしまった又は、倒壊の危険のある家の傍にあり両方を併用して暮らしています。



次の事業地は、バゲスワリ村でスダール村から車で5分程度下ったところにあります。平成27年度の海外援助活動助成を受けて設置したバイオガスプラントを視察しました。スダール村に比べ、バゲスワリ村のこれまでの設置数は56基とあまり進んでいません。

ここでは、BSP(biogas support program)に登録しているバイオガスプラントの技師の方にお話を伺うことができました。その後、一般的には牛糞を発酵させてガスを発生させるのを地酒であるロキシーの残り滓を利用している農家のバイオガスプラントを視察しました。話によると牛糞より火力が強いようです。

続いて、製作中のバイオガスプラントを2か所見ることができた。

1基当たりのバイオガスプラントは年間5トンの二酸化炭素の減少と薪の使用量も4,000kg減少すると言われています。これまで国際ボランティア貯金の寄附金配分で963基、財団の助成で34基、計997基設置しています、二酸化炭素(CO₂)4,985トン/年間削減し、薪の使用削減量3,988,000kg/年間となります。

家事等の燃料だけに止まらず、地球温暖化を防ぐ意味からも、また、薪を運ぶ重労働からも解放され、煙による呼吸器疾患等のリスクからも解放され、良いことづくめのシステムであることを痛感いたしました。

次の訪問地は、カトマンズ郡チュニケル村のナウリンセカンダリースクールは、幹線道路から脇道に逸れるとデコボコ道となり、上り下りの連続で20分位揺られ揺られて到着した。後で聞いた話であるが、数年前まで道はなくチュニケル村まで来るのは容易ではなかったそうです。

カトマンズ郡ということで、中心地からもさほど離れていないので、スムーズに来られると思っていましたが、前述のとおり幹線道路を外れるとまだまだ道は整備されていません。

学校に入ると児童からの歓迎を受け講堂に案内されると大勢の児童や先生、父兄が待っていました。

校長先生から(公社)アジア協会アジア友の会との関わりや、ネパールと日本との関わりなどの話をした後、それぞれが自己紹介を行いました。

児童からは毎年財団からの助成を受けて(公社)アジア協会アジア友の会が実施している環境セミナーで得た知識などを活用して、児童の環境活動の発表や状況の報告がありました。

最後に、ネパールは、内陸国で海外からの企業の進出も難しい地理的条件となっていて電気、道路、灌漑など社会インフラの不足、ガバナンスの脆弱などの

問題も抱えています。それに加えカースト制度が残っていること、自分のことが優先といった国民性などが足かせとなっているようです。このため南アジアで最も所得水準が低い後発開発途上国となっています。また、最近では中東や日本、韓国への出稼ぎが多くなってきており貧富の差が広がっています。

今後もネパールの発展は厳しい状況が続いていくものと思われるが、今のところ、トレッキング等の観光が外貨を獲得できる唯一の産業となっていることから、観光地区への車の乗り入れ規制や震災で倒壊した世界遺産などの修復など観光に掛かる整備を行い国が少しでも豊かになることが、ネパールの国民ひとりひとりの生活水準を上げる一番の早道ではないかと感じました。